

咲夜の「」で囲まれたセリフの収録をお願いします  
音声ファイルの最初にはお名前をお願いします。

「シーン1…戦闘」

とにかくあのアホを連れ戻さないと……

音速を遥かに超えた速度で駆けるパールバティの中に歌が響きわたる。

「何あの女……」

「ムカつく……」

「勘違いしてんじゃない……」

「ちよと可愛いからって……」

咲夜「記憶が読めるタイプ？」

咲夜「その程度の悪口……聞き飽きた!!」

咲夜「特殊相対性理論と音が伝わる仕組みを

小一時間説教してやりたいわ。」

レーザー McMahon を打つ。

光の塊がパールバティより放たれる。

外した？

いや避けた？

咲夜「マッハ800で動いている天罰機から放たれた光の速度に近い

レーザーを…かわした？」

咲夜「化け物め……アインシュタイン先生とニュートンさんに謝れっ。」

咲夜「空、私がありつたけの弾を奴に叩き込むからそのまま逃げなさい」

空「……………」

咲夜「ちよつと聞いているの？」

バイラヴィが反転する……まさか戦う気？

咲夜「くそっ……フランクス起動、全弾装填、

とにかく弾切れまで打ち続けるパールバティ」

もうヤケクソだ、フランクスを無茶苦茶に連射しまくる。

セラフイムεが前後左右に避ける、こいつ……なんて速さだ……………」

フランクスの残弾が切れる警告音が鳴った。

だめっ弾が切れたら……殺される……………」

カロロ……弾倉が空回りした。

フランクスの残弾が尽きた……………」

セラフイムεは美しい笑顔を浮かべる。

「おめでとう……………」

セラフイムεがパールバティに迫る。

ダメだ……………」

次の瞬間セラフイムεの脇を光がかすめる。

レーザートマホーク？

セラフイムεは目にもとまらぬ速さで横に飛んだ。

頭上からバイラヴィが衝突する

何？

セラフイムεの挙動を詠んでいた？

「何でこんな悲しい事するの……………」

空「フアランクスっ」

ゼロ距離からフアランクスを打ち込まれてセラフイムεは粉々に砕け散った。

咲夜「なんて奴……こんな戦い……明弘でも無理。」

「シーン2…戦闘2」

核爆発で勢いを得たパールバティは混乱するアスラの群れを突っ切る。

咲夜「ちよっ空……撃ってっ！」

空「大丈夫、かわして」

咲夜「無茶言わないでっ……」

といいつつもアスラの横をギリギリですり抜ける。

空「レーザートマホーク発射！」

前方の観世音タイプが吹き飛ば……

咲夜「あと二発っイける？」

空「たぶん……」

空は立て続けにレーザートマホークを連射、

二体の観世音タイプを葬り去った。

もう弾切れ……あとは逃げ切るしかない。

「告白されたあの日……」

咲夜「そんな……」

「悪く無いと思っていたでしょ……」

空「……」

「何で断ったの……」

∞体のセラフイムε（イプシロン）が前方に見えた。

「もういいんだよ……」

咲夜「やだな……これまでなの？」

「体のセラフイムεがパールバティを捕らえた。

抗いようがない、速度が一気に落ちる。

後方から無数の観世音タイプが迫る。

咲夜「ねえ、空……キスしていい？」

空「……………」

咲夜「このまま死ぬの……なんか……ムカつくから……………」

空「……………来る」

咲夜「えっ？」

眼前のセラフイムεが砕け散った。

咲夜「なに、何なの？」

明弘「ひゃっはああああ、ヒーロー到着っ！」

咲夜「あっ明弘？」

オーバーブーストで超加速したトリプラが一瞬で

2体のセラフイムεを撃破した。

明弘「咲夜、空……生きてるかっ？」

咲夜「明弘……バカっ……アスラの数解らないの？」

あんたも逃げきれない……」

明弘「はっはっはー地球統合軍の奴ら、いよいよヤヴァイと思ったようだぜ」

咲夜「えっ？」

明弘「グラビティー・ブラスト三連正射！」

後方でマイクロブラックホールが生まれ、アスラが吸い込まれる。

「シーン3…ツンデレ」

セラ、明弘……そして空。

明弘「よう、咲夜！助かったぜ、ありがとな！」

セラ「咲夜、お弁当…凄く美味しかったです。また作って下さいね。」

咲夜「明弘、こちらこそ…ありがとうございます。助けに来てくれなかったら、

死んでたから……」

咲夜「セラ、心配かけてごめんね。」

咲夜「空、私のファーストキスを奪った罪で殺すから、覚悟OK？」

空「咲夜……だってキスしてって……」

顔が一気に真っ赤になる。

咲夜「死にそうになった状態で…気の迷いつが生じたの……

生還してから不意打ちでキスするなっ！！」

咲夜「私……始めて……だったんだから……」

空「僕もキスした事、無かったから…おあいこだね。」

私は空の顔面に正拳をぶちこんだ。

咲夜「責任とってもらうからね。覚悟しなさいよね！！」

「シーン4…恋人」

咲夜「ねえ、空……私達も……死ぬのかな？」

空「……………」

空は答えない、いや答えられない。

成層圏をアスラに奪われ地上に落とされた人類。

高みの見物を決め込んでいた大人達、私達を選んだ生徒達……

全ての人類が青ざめている。

むしろ死と隣り合わせの日常を送って来たクシャトリアの方が気楽なのかも、

—咲夜—

空「僕は……生きるよ、きつと……」

咲夜「そうね、空は凄いよね。明弘にも引けを取らない……」

空「生き続けて……咲夜を守り続けるよ……」

咲夜「空……」

私は何故かとても切ない気持ちになり……空を抱きしめる。

空「咲夜……」

咲夜「空……キスしていい？」

空「えっうん……でも後で……なぐらないでね」

咲夜「なっ殴らないわよっ、あれは空が不意打ちするから……」

耳を劈くようなエマーゼンシーアラートが敵襲を知らせ、

恋人たちの時間を終わらせる。

私は空を抱きしめキスをした。

咲夜「空、明日……もう一度しようね。」

空「うん、咲夜……約束だよ」

私達は手を繋ぎ、天罰機へと走って行った。